

京極派歌人の「柳」詠考—水墨画との関係について—

お茶の水女子大学 曹怡

今まで、京極派と絵画作品の関係について、先行研究で屡々指摘されている。次田香澄「玉葉・風雅集における自然美の様体」では、京極派の自然描写の歌は、水墨画の模糊とした水蒸気を通して描かれた自然に近い、絵画的であると指摘されている。しかし、詠まれていた実際の風景について、具体的に水墨画作品からどのような影響を受けたか、まだ明らかにされていないと思われる。

当時鎌倉時代、禅宗寺院を通して、伝来された大陸の宋元時代の文化が、日本の貴族社会において広く流行りになった。持明院統の花園院(一二九七年～一三四八年)が水墨画を好み、宮中でよく鑑賞したのである。そのような背景の元に、京極派歌人の特異な歌は、中国から伝わった絵画の世界と関連づけられると考えられる。

一方、万葉集から平安時代の和歌においては、「柳」という植物は、春の素材として多く詠まれたものである。しかし、京極派歌人たちが、柳を秋冬の景として多く詠んだと、『歌ことば歌枕大辞典』では指摘されている。その発想が何によってできたのかが、まだ研究の余地がある。

本研究は、柳歌を取り上げ、京極派和歌と水墨画の関係について考察した。

まず、二十一代勅撰和歌集の中、柳を詠む歌を統計したところ、『風雅和歌集』では、柳のイメージが四季の共通的なものに発展していたと判明した。京極派歌人たちの間には、今までになかった特異な柳詠が多く見られる。春の「梅柳」、または『風雅集』秋冬部において、柳への新たな歌の世界が形成されていた。

春の「梅柳」は、古代万葉集の世界と一線を画し、新たな美的趣向が含まれている。為兼、伏見院の「梅柳」詠には、遠方の霞んでいた風景と合わさり、柳と梅が共に色を競うような写実的な風景が、『詩人玉屑』に収められた漢詩と共通し、さらに、水墨画から創作の種を得たと伺える。伝来された「書斎図」「四季図」などの作品に、描かれている柳と梅が、時代の流行になっており、春の代表景物として、組み合わせたのである。

また、冬の柳詠について、京極派歌人たちの間では、「枯枝」「枯木」というイメージが多く詠まれており、「枝さびて」など新しく作られた表現が用いられている。そのため、彼らの独特の閑寂美の世界が作り上げられていた。当時、そのような枯れさびた美意識が浸透したのは、「枯木寒鴉」などに関する水墨画作品から影響が与えられたためである。「疏柳寒鴉図」に描かれた画面内容と花園院一条の歌が共通していることを指摘する。

京極派以降の時代で、水墨画は盛んに作られるようになった。そのような歴史の背景の中、水墨画内容と関係のあるものは、まず新風を唱えた京極派和歌に、特に絵画趣味を持っていた花園院周辺に一早く摂取されたと考えられる。